

### 3 五輪塔・板碑群 (第105~107図・図版8・29・30)

B区の道の延長上には、五輪塔・板碑が並んでいた。五輪塔・板碑は、以前の県道木城・高鍋線改良工事にあたって現在の位置に移設されたといふ。移設以前の位置・配置は、現在調査中である。五輪塔・板碑には、その形態的特徴からみて複数時期のものが混在している。

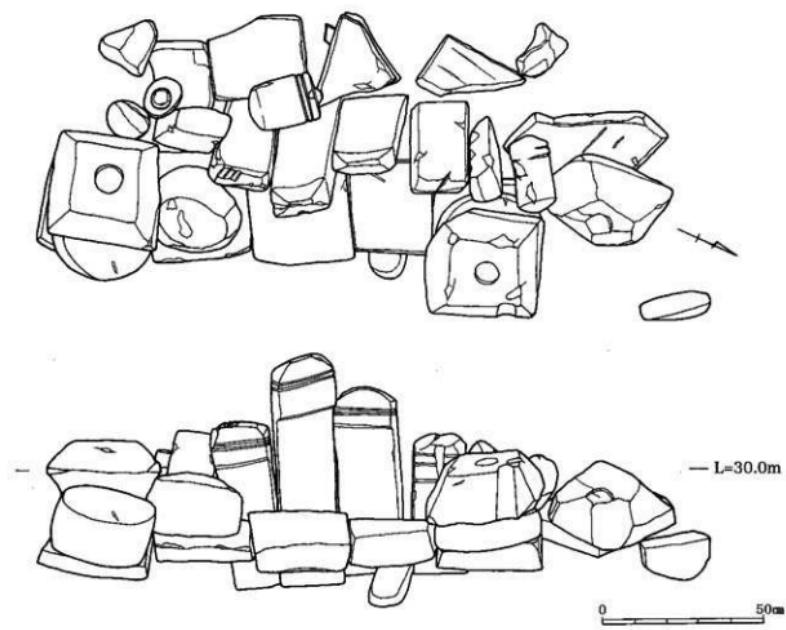
板碑は県道側を正面に向きを捕えて立ち、板碑の前には地輪が並ぶ。ほかは、板碑を中心に水輪・火輪などが混在して、板碑を支えるように積まれていた。これらの特徴から、移設にあたって「詣り墓」のような意識があったと推測される。念のため、五輪塔を外して、その下部にトレンチを設定・掘削した。その結果、五輪塔は現表土の上に載るとわかり、これらが確実に移設されたものであることを確認した。なお、五輪塔は、県道脇の平場に、調査以前の状態で移設され、見学可能である(第108図)。

板碑は5基あり、706・707には墨書が残る。墨書は、正面下部、土中に埋まっていた部分のみ判読可能で、その判読は、肉眼・赤外線カメラを併用した。706は、正面下部に右から「…□依 …□…□ 願主 敬白 …□二月廿七日」と読める。身部にも墨の残着が見られるが、判読できない。707は、基部に何らかの文字が残るが判読できない。

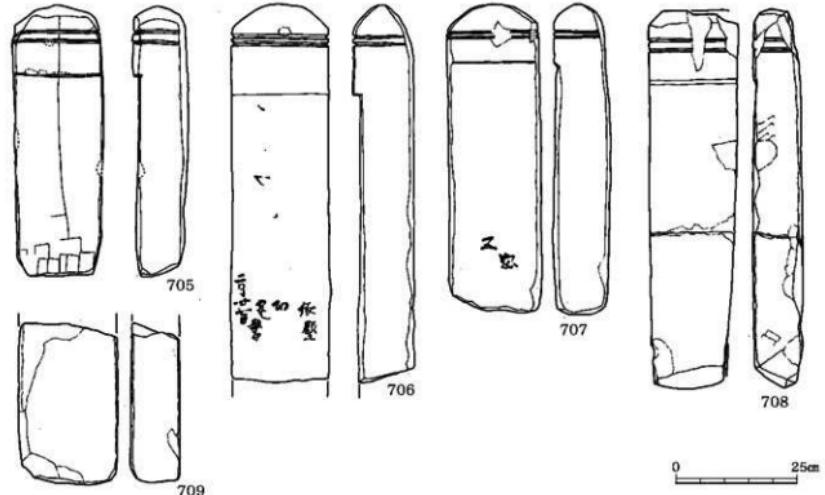
板碑はいずれも額の突出、薬研彫りの二条刻線が入る。空輪(710~713)は円頭形で側面を削りそいだ形状で、空輪と風輪との境は薬研彫りの二条刻線が入る。火輪(714~716)は笠の開きが弱い。水輪(717~719)の納骨孔は形骸化し、浅い凹みでしかない。地輪(720~728)の受部は、やや凹む程度である。721・726・728には、整形に伴うノミ痕がある。

第45表 五輪塔・板碑計測表

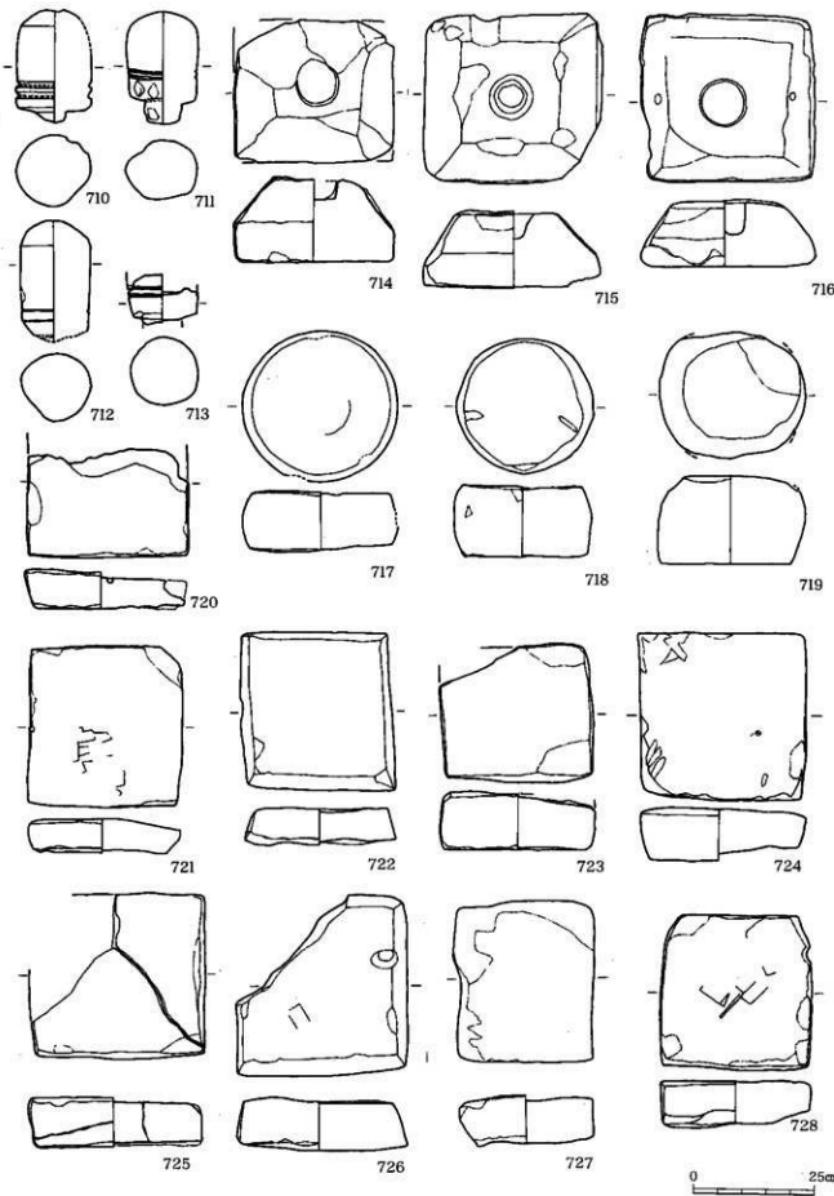
No.	種類	高さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(kg)	石	材質	備考
705	板碑	56.6	19.1	11.8	11.0	磨擦な凝灰岩		ほかに北面は突出し、条縫(面面V字)も5~7mmと深い。付け根部には網羅工具痕がある。
706	板碑	77.6	20.8	12.6	10.0	磨擦な凝灰岩	正面「…□依 …□…□ 願主 敬白 …□二月廿七日」	ほかに北面は突出し、条縫(面面V字)も5~7mmと深い。
707	板碑	63.6	19.0	12.4	14.0	磨擦な凝灰岩	正面にアリ・羽根不規	額の突出深い。
708	板碑	78.0	18.6	10.1	—	磨擦な凝灰岩		難立背: 上面は生きており、面をなしている。額の突出深い。
709	板碑	33.2	20.4	10.1	7.0	磨擦な凝灰岩		
710	空輪	23.4	16.0	14.8	4.5	薬研彫		円頭形で削がれる。表面は2本あり、深さ5~7mmと深い。
711	空輪	23.4	14.8	12.2	3.7	薬研彫		円頭面で削がれる。表面は2本あり、深さ5~7mmと深い。
712	空輪	25.2	14.6	14.0	3.5	薬研彫		薬研彫: 表面は工具痕の可逆性がある。
713	空輪	10.2	14.0	14.0	1.5	薬研彫		薬研彫: 表面は工具痕の可逆性がある。
714	火輪	29.5	32.8	17.1	13.0	薬研彫		火輪: 削がれの跡がある。
715	火輪	36.8	33.0	16.1	16.0	薬研彫		火輪: 削がれの跡がある。
716	火輪	30.4	28.0	13.8	14.8	薬研彫		火輪: 削がれの跡がある。
717	水輪	31.5	29.0	12.5	11.5	薬研彫		水輪: 削がれの跡がある。
718	水輪	28.0	24.4	14.6	10.5	薬研彫		水輪: 削がれの跡がある。
719	水輪	28.2	26.0	18.2	12.0	薬研彫		水輪: 削がれの跡がある。
720	地輪	32.8	11.2	7.0	5.0	薬研彫		上下面は磨かれていて、表面は滑らかである。
721	地輪	31.4	33.6	7.2	6.0	薬研彫		上下面は磨かれていて、表面は滑らかである。
722	地輪	31.0	32.8	7.7	9.0	薬研彫		深い受け部あり。底部は剥落か? 磨化のため凹面でない。
723	地輪	31.6	28.0	11.8	9.7	薬研彫		受け部はない。コーナー部は剥離。
724	地輪	34.0	34.6	11.0	13.0	薬研彫		上下差か? 剥離。
725	地輪	35.6	34.0	10.2	9.0	薬研彫		底面では分離されており、調査に伴って接觸した。
726	地輪	35.2	27.8	11.0	12.0	薬研彫		受け部はない。
727	地輪	29.0	33.6	10.1	9.0	薬研彫		表面は磨かれていて、表面は滑らかである。
728	地輪	31.0	32.0	12.4	9.8	薬研彫		表面に工具痕跡に残る。



第105図 五輪塔・板磚検出状況



第106図 板磚実測図



第107図 五輪塔各部実測図



## 第6節 近世以降の遺構と遺物

### 1 土 坑 (第109図・図版8)

A2区南側には土坑群が検出された。それらは丘陵頂部より一段低い平坦面に掘り込まれ、土坑間に切り合いはない。各土坑は直径1~2mの円形から方形プランで、残深は削平具合にもよるが最大で1.3mとなる。埋土は黒色土を基本とし、分層できない場合が多い。少量のイヌ骨のほか、ウシ・ウマ類の骨が多く含まれる。出土遺物や遺構の配置状況からほぼ同時期の遺構群として捉えられる。

【SC1】 古墳周溝のすぐ脇で検出されたことから、地下式横穴墓、あるいは古墳石室等の残骸である可能性も考慮しつつ調査を進めた。埋土は全体に軟らかく、やや粘性がある。埋土5層は、遺構の掘り込まれるXII層の土が混じる。壁面の崩落か。埋土3・4層は色調の違いで分層でき、3層からイヌ骨・古鏡(733)、4層から刀剣類(729・730)・イヌ骨が出土した。埋土1・2層は埋土3・4層に比べ色調が明るい。なお、埋土1~4層中には人頭大の礫がいくつか咬んでいた。

【SC2】 埋土は礫を多く含む黒色土1層であり、分層はできない。埋土中からは、細片となった獸骨が少量出土した。縄文土器等は、SC2に切られたSC3Bに本的に伴なうものであろう。

【SC3】 埋土は一様で分層できず、礫が大量に混じる。埋土上部から中部では土瓶(731)、イヌ・ウシ・ウマ類骨が出土した。土瓶は、土坑検出面から10cmほど掘り下げた段階で、立位状態で出土した。底部は円形に穿たれ、土瓶の蓋は土瓶の口をふさぐような格好で土瓶中に入っていた。

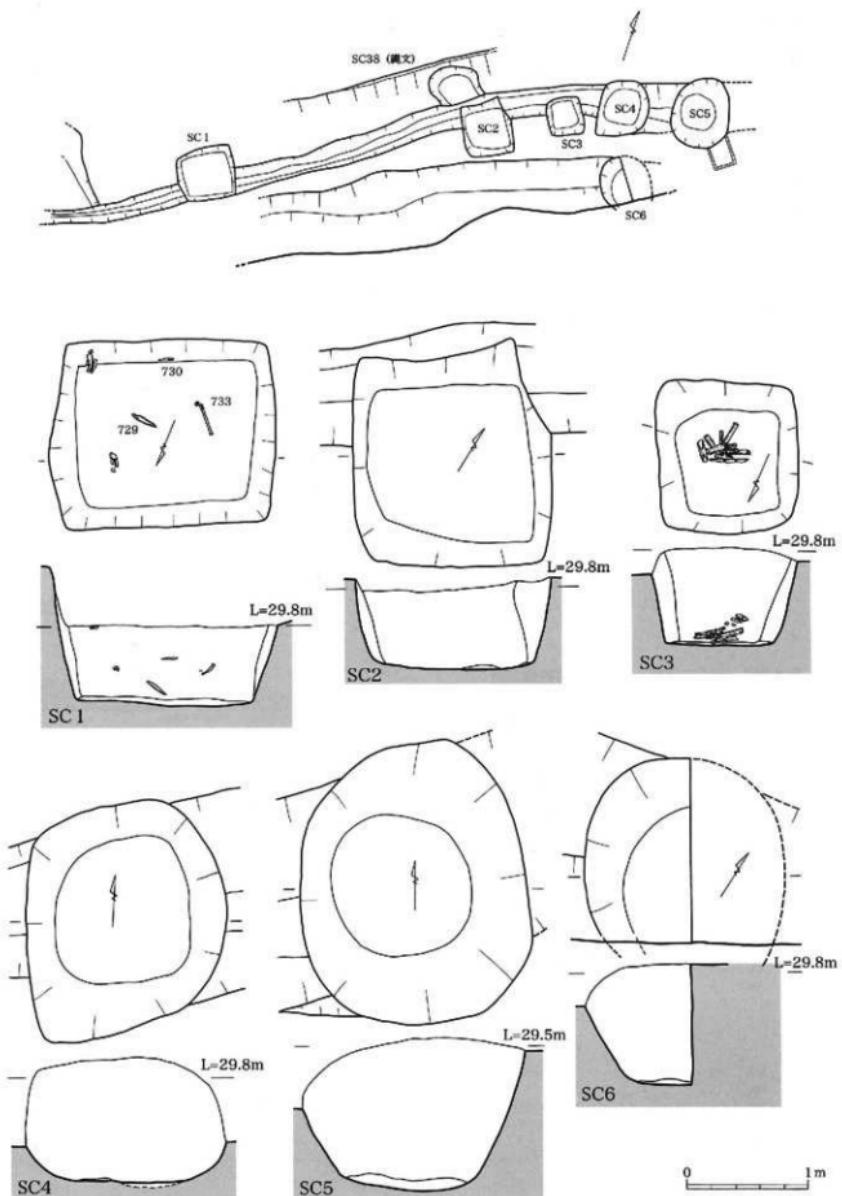
土坑の最下部からは、おもにウシ・ウマ類の臼歯・大腿骨などの大型骨、イヌの下顎骨などが折り重なって大量に検出された。獸骨は解剖学的にバラバラであり、特に大腿骨が目立った(図版8)。獸骨は埋土上部から中部にも含まれたが、最下部に比べ少ない。

【SC4】 SC3と同じく、埋土は一様で分層不可、礫が大量に混じる。埋土中からは土瓶蓋、碗類と思われる小片が各1点ずつ出土したほか、獸骨の細片が少量確認された。

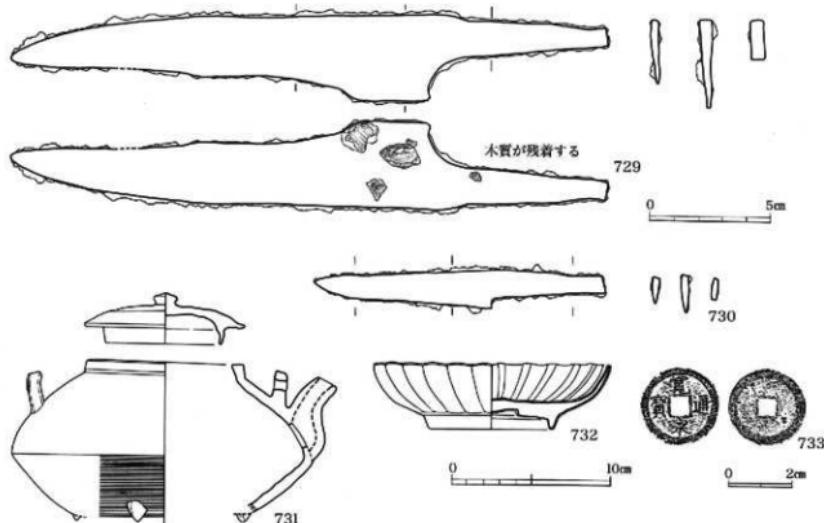
【SC5】 SC1~4と異なり、円形プランである。遺構確認面から15cmほど下げると、長径5~10cmの円礫が検出された。円礫は隙間なく充填されており、円礫中には菊皿(732)が混じていた。円礫充填の下部はしまりのない褐色土層で、多くの巨礫とその間に獸骨が散在していた。土坑底面には炭化物片が若干認められた。

なお、調査の過程で、SC5は検出から掘削までしばらく期間があった。その結果、遺構プラン内にのみノビルが生え、意図せずしてより鮮明な遺構プランを掘むことができた。これは、遺構埋没過程でノビルが混入した、あるいは獸骨などとともにノビルが廃棄されたなどの可能性が推測される。

【SC6】 SE4を切る。半裁した時点で調査を終了した。埋土はSC1~5の状況と同じである。獸骨ほか、遺物はなんら出土しなかった。



第109図 近世以降の土坑配置・土坑実測図



第110図 近世以降の土坑出土遺物

第46表 近世以降の土坑出土遺物観察表

No.	出土位置	形	基盤	墻跡	墻跡状況	長	幅	厚	重量	備考
729	SC1	18~19C	鉄錐	刀子	丸形	24.6	3.8	0.7	103.2	木質が残着する。730に比べ大形。
730	*	*	*	刀子	丸形	12.1	1.5	0.4	16.9	729に比べ小形。
731	SC3	*	陶器片	土瓶	丸形					縁あり。高部は裏面に円形に打ち欠いている。
732	SC5	*	*	豆	丸形					縁あり。逆の日字形裏面。
733	SC1	*	鉄錐	買ふ道室						

第47表 近世以降の土坑および出土獸骨の概要

土坑No.	深度( m )	形	骨	骨			埋土中の遺物( 縦を厚く )	
				平底	長手	短径		
1	方形	1.9	0.6	1.2	イヌ	下顎骨の第一後臼歛 中手骨あるいは中足骨の裏様 2.5cm	184.3	他土坑と比較して大形骨があらねない。下顎骨 のみ分化したが、埋土上斜から下部までみられ、 あきらかに裏面からは厚いでいる。歯肉も少 ない。下顎骨から、イヌの最小個体数は2。
2	方形	1.6	1.8	0.7	—	絆片のため測定不能	未計測	小片化した歯骨が少量含まれる
3	方形	1.2	1.3	0.6	イヌ	イヌ:下顎骨の第一後臼歛 ウシ・ウマ類:ウシ・ウマ類:臼歛・大顎骨	983.6	埋土上~中・下部には小片化した歯骨がまんべ んなく含まれる。
*	*	*	*	*	*	*	603.8	裏面にはウシ・ウマ類の大顎骨・臼歛、イヌ下 顎骨など、大顎骨を中心とした集落があつ た。
4	圓形	2.0	1.6	1.0	—	絆片のため測定不能	未計測	小片化した歯骨が少量含まれる
5	円形	2.3	1.9	1.3	イヌ	イヌ:下顎骨の第一後臼歛 ウシ・ウマ類:ウシ・ウマ類:臼歛・大顎骨	974.5	中位にみられた円環骨下から床面までに、歯骨 が少量含まれる。
6	円形	1.5	1.6	1.0	なし	—	0.0	名古なし。

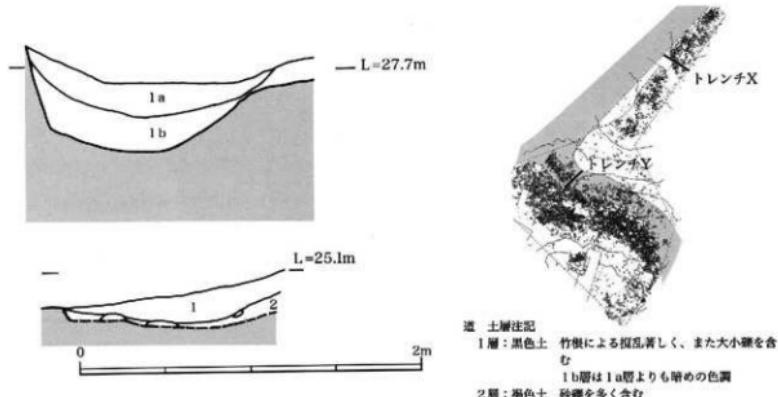
## 2 道(第111・112図、巻頭図版7)

丘陵先端部については、段落ちした箇所が平坦であることから曲輪の可能性が指摘され(確認調査T14)、また曲輪の土手部分に露出した礫について、集石墓でないかとの指摘も出された。そこで、調査は土手部分の礫を追いかける格好で、竹根の著しい表土を除いていった。表土中には数多くの礫とともに陶磁器類や石製品(734~774・776・777)も含まれていた。表土を除くと、丘陵に沿ってカーブしながら登っていく浅い凹面と、その土手に帶状にのる礫の集まり(以下では集礫と呼ぶ)が明確になった。この時点での丘陵を登る浅い凹面を道が埋没したものと認定し、道と集礫との関係把握のためにトレンチX・Yをあけた。

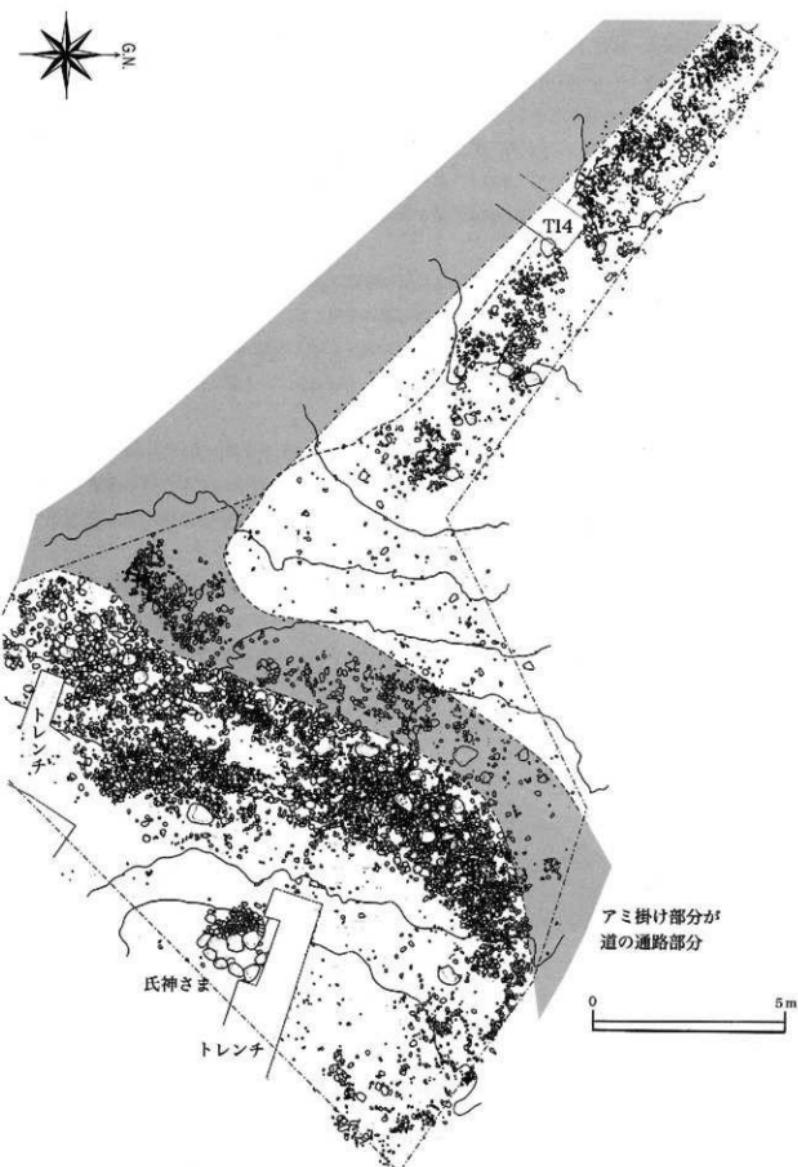
トレンチX(第111図上段)では、丘陵(A区)側の壁面はほぼ垂直に立ち上がり、斜面側に土手を盛っていた。道埋土は黒色土であり、下部にいくほど黒みを増した。土色の差については、竹根などによる攪乱の度合いに起因すると判断した。黒色土中には数多くの大小礫が含まれ、これらは壁面に露出した段丘礫が崩落したものと判断した。土手上の集礫も、本来的に1~2層に含まれていたものが露出したものと判断した。

トレンチY(第111図下段)では、トレンチXと同じく斜面側に土手を盛っていた。道埋土はトレンチX層に近い黒色土であり、やはり数多くの大小礫が含まれていた。床面は大形の礫も露出する礫層面であり、大形礫のすき間や凹面を埋めるような格好で、近・現代の瓦・陶磁器が部分的に敷き詰められていた。

トレンチX・Yの所見から、確認調査で指摘された曲輪・集石墓の可能性は消え、近代まで使用された道と、道掘削の際に掘り上げられた段丘礫層礫が道の脇に小積まれたものと判断された。念のため、最終的に集礫はすべて除去し、特殊な石材が混在していないか、集礫に何らかの下部構造があるのかに注意したが、何ら検出されなかった。



第111図 道断面実測図



第112図 道 平面図 (S=1/125)

集落および道の埋土中には、陶磁器類・鉄製品・石製品・古銭のほか、縄文時代から古墳時代までの土器・須恵器片・石器類が混在していた。

陶磁器類（734～763）は碗類が20点近くともっとも多い。碗類（734～742・744）は、外面に萬の葉文・丸文・二重網目文など多様な文様が描かれ、見込みにコンニャク印判で押された五弁花文を持つものが多い。碗類のほか、皿（746・755・763）、壺？（754）、大小の擂鉢（758～761）、鉢（748）、瓶（徳利か）（756・757・762）、灯火具（743・749）、火入れ（751）、仏飯具（753）といった各種生活雑器がある。

これらの時期については、型紙刷りが763のほかほとんど出土しておらず、また現代のプリント系を除くとその大半が18C後半から19C前半に集中している。生産地と器種の関係では、肥前系のものが多数を占めるなか、鉢や壺と思われる大形品に、胎土などの特徴から薩摩系と思われるものが少数みられる。肥前系のものには746など白色を基調にピンク色に発色するものがいくつかみられる。

鉄製品には釘・刀子・鎌など（764～767）がある。

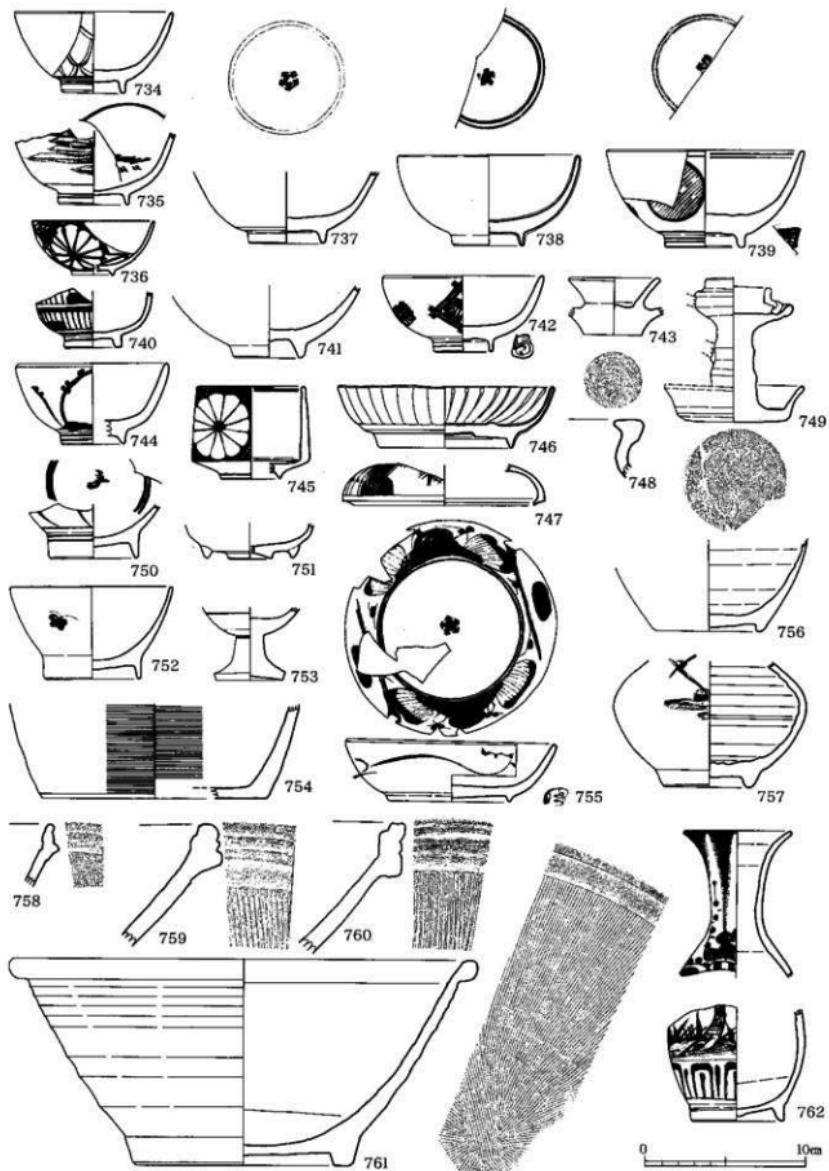
棹秤（768）は、分銅、目盛のある棹の一部と棹に接着した把手である。分銅には縦書きで「量一貫エヒメ口（改行）二二〇八六」と刻まれる。

石器・石製品には砥石・硯・石盤・乳棒（769～772・777）がある。硯や石盤は、遺跡横の清水尋常小学校（明治28年5月から明治37年3月まで開設）に関連するとも考えられる。

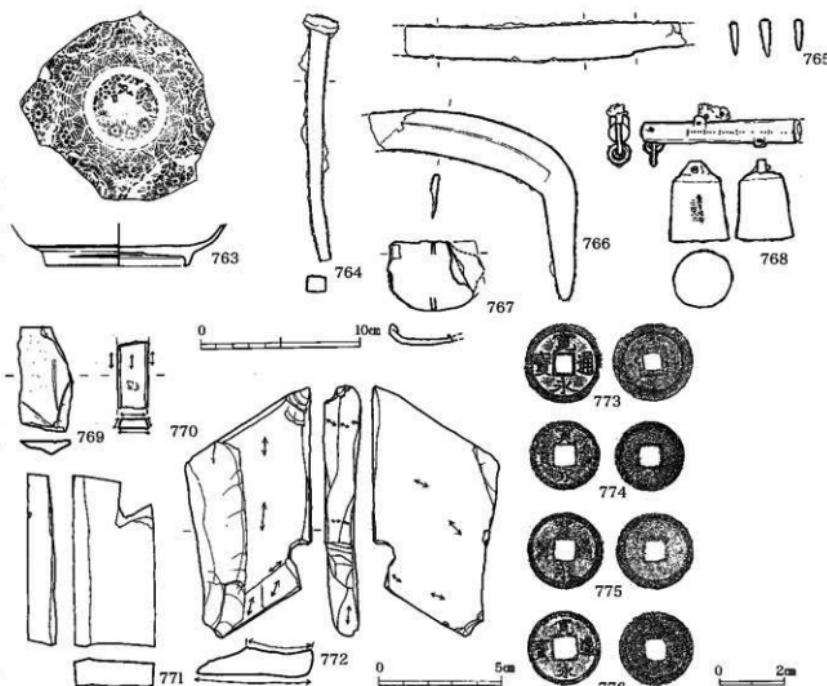
古銭はすべて寛永通宝（773～776）である。背に「文」や波はない。銭径は、773が相対的に大きくなるのは小さい。

第48表 出土陶磁器観察表

No.	出土位置	附 印	種類	現存状況	體積 (cm)			色調	輪郭	備 考
					口径	高さ	底面			
734	B区	18～19C	丸形板	完全	9.7	5.2	4.0	灰白色	灰白色	二重網目文。
735	*	*	丸形板	口縁なし	-	-	4.5	灰白色	灰白色	
736	*	*	丸形板	完全	7.6	3.4	2.6	灰白色	灰白色	花粉らし。薄手。
737	*	*	丸形板	底部のみ	-	-	4.8	灰白色	網目文	
738	*	*	丸形板	完全	12.1	5.8	4.5	灰白色	耐オーリーブ灰色	外青織紋付け。
739	*	*	丸形板	完全	12.1	6.2	5.0	灰白色	耐オーリーブ灰色	丸文。
740	*	*	湯呑	口縁なし	-	-	3.6	灰白色	灰白色	
741	*	*	丸形板	口縁なし	-	-	4.5	灰白色	内：にぶい緑、外：オリーブ灰	網目系。
742	*	*	丸形板	完全	9.8	4.9	3.7	灰白色	灰白色	裏板？と墨の裏文。
743	*	*	灯籠脚	越欠	5.8	3.7	3.6	灰白色	灰白色	裏板。
744	*	*	丸形板	完全	9.2	5.2	4.0	灰白色	淡黄色	花粉らし。
745	*	*	湯呑	完全	6.6	5.5	3.8	灰白色	灰白色	網目文。
746	*	*	皿	完全	12.3	3.9	8.3	灰白色	灰白色	網目文。
747	*	*	蓄付鉢	皿のみ	10.2	-	-	灰白色	灰白色	網目文。
748	*	*	鉢	口縁のみ	-	-	-	黄褐色	耐オーリーブ色	
749	*	*	舟形瓶	完全	8.6	9.2	6.3	にぶい赤褐色	黄褐色	把手を欠く。受け皿口径4.2cm。
750	*	*	広葉瓶	-	-	5.6	灰白色	灰白色		
751	*	*	火入	底部のみ	-	-	2.8	灰白色	耐オーリーブ灰色	
752	*	*	広葉瓶	完全	10.2	5.9	6.1	灰白色	灰白色	宝文。
753	*	*	仏龕	口縁なし	-	-	4.2	灰白色	灰白色	紅色に充血。
754	*	*	盞？	底部のみ	-	-	14.0	鐵白黄色	耐オーリーブ色	網目系。内外面とともに模方向の力キ。
755	T3墓	*	小豆	完全	12.9	3.7	7.6	灰白色	網目文	
756	B区	*	瓶	底部のみ	-	-	6.6	灰白色	網目文	
757	*	*	瓶	底部のみ	-	-	5.7	にぶい黄褐色	灰褐色	瓶径12cm。
758	*	*	擂鉢	口縁のみ	-	-	-	褐色	褐色	
759	*	*	擂鉢	口縁のみ	-	-	-	網目文	褐色	
760	*	*	擂鉢	口縁のみ	-	-	-	褐色	褐色	
761	*	*	擂鉢	完全	28.2	13.1	13.3	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	
762	*	*	瓶	手元形	6.4	-	5.8	灰白色	灰白色	

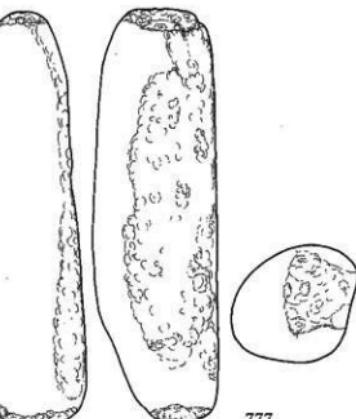


第113図 出土陶磁器実測図



第49表 近代ほか出土遺物観察表

No	出土位置	時 期	種 類	備 考
763	8区	*	陶磁器 皿	型壓模。鉢の目形高台。寸法から五寸釘である。直面形。
764	*	*	鉄器 角灯	
765	*	*	刀子	鋼の場合は後代品の可能性がある。
766	*	*	鏡	両端が折り返されたような形状。上端・下端ともに穴があるため、鏡の刃ではない。
767	*	*	曲?	
768	近世~現代	-	笄	城壁瓦製。剥落著しく、正面面(鏡面)はわずかに残るばかり。鏡面には釘のもので引ついたような跡がある。
769	理治	石器品 石椎		小形で断面台形。上下端を欠く。直面形である。
770	*	近世~現代	端石	小豆色の石材製。矢張が砸しい。表面がわずかに残る。正面から鏡面にかけて墨を強調する。
771	*	近世~現代	鏡	淡褐色の石材製。表面とともに微弱な斜面があり、ときに表面には斜状に平行した、やや深い槽が残る。
772	*	近世~現代	端石	淡褐色の石材製。表面とともに微弱な斜面があり、ときに表面には斜状に平行した、やや深い槽が残る。
773	*	18~19C	鉛質 長永造室	新真品。
774	*	*	真永造室	
775 A2区	*	*	真永造室	
776 B区	*	*	真永造室	
777	近世?	石器	乳?	上下両端に顯著な鋸形打目。側面にはクール付目。重量642.8g。



第114図 近代ほか出土遺物実測図

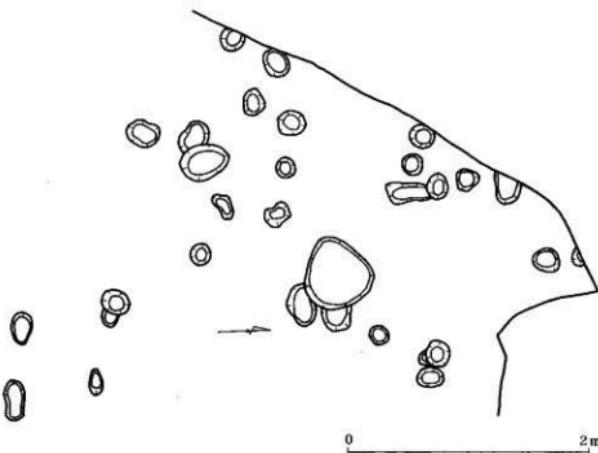
## 第7節 その他の遺構

ピット状遺構群（第4・115図）A2区北西の丘陵端部に、ピット状遺構約30基の集中箇所が検出された。検出面はVII層面である。ピット状遺構の性格については、埋土が暗褐色土であることや平面分布の重なる位置で縄文早期～古墳時代中期までの土器片などがみられたことから、縄文早期～古墳時代中期あたりの柱穴をもつ遺構と推定したい。

**■位 横 軸** A2区内に4基確認された。直径2mほどの大形のものが多く、大半はVII層～イワオコシまで横軸していた。

**生物痕跡**（図版8）A2区のIII～IV層掘削中に、「シミ」が検出された。「シミ」は、幅20～40cm、深さは一定でなく、方向に規則性はなく縦横無尽に走っていた。「シミ」の色調は縄文早期の炉穴に似ていたため、「シミ」を炉穴と想定し、調査は、まず「シミ」の広がりを押さえた上で半裁、各所に土層観察用の鞋を残しながら進めた。その結果、「シミ」の埋土中にはわずかに炭化物片が含まれること、床面がVII層（AT下位の暗褐色土層）を越えないこと、断面直径40～50cmほどで地点によってはオーバーハングぎみに壁が立ち上がるところがあった。遺物は出土しない。

さて、調査中にモグラが縦横無尽に走り、遺構壁面を壊したことがあった。モグラのとおり道を観察すると、幅は20cmほどで、III～VII層中に生活道を残していた。注目されるのは、方向に規則性はなく縦横無尽に走ること、VII層（AT下位の暗褐色土層）を削っていなかったことであり、さきの「シミ」と酷似していた。モグラは遺構を破壊する厄介物ではあったが、そのおかげで、上の縦横無尽に走る「シミ」は「いつかのモグラ道」であると判断できた。VII層は硬く、モグラは掘り進められなかつたものと推定される。



第115図 ピット状遺構群平面図

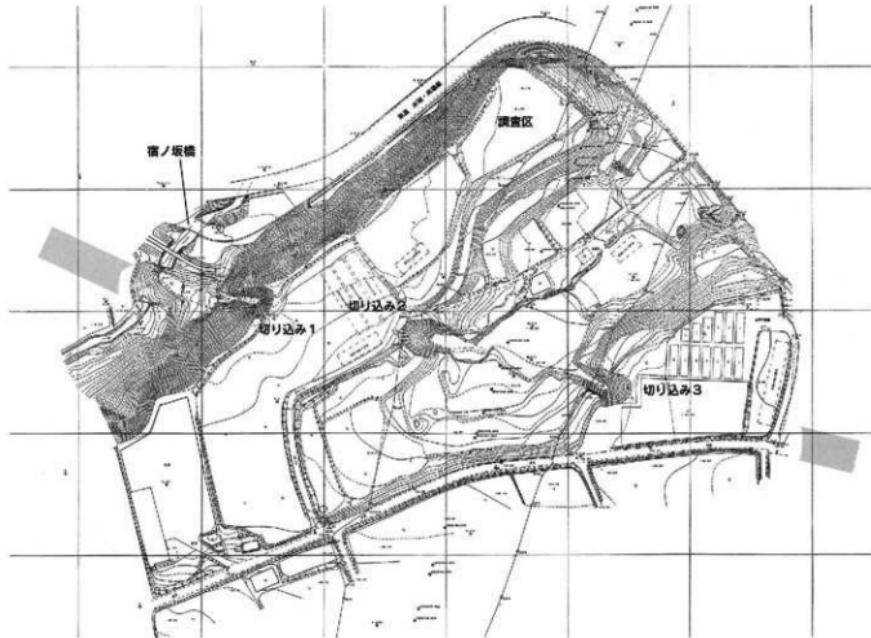
### 【高鍋軽便鉄道跡】

当センター職員による調査前の踏査の結果、「堀切」様の切り込み3ヶ所を確認し、中世期の遺構との関連が注意された（第116図）。

野首第1遺跡一帯は、中世戦国期に大友・島津による高城の合戦（小丸川の合戦）がくりひろげられた場所である。今回の調査区は、小丸川に向かって舌状に張りだした丘陵上に位置し、高城の合戦はか中世期の合戦に関する砦等の遺構の存在が十分に予想され、「堀切」様の切り込みについても遺跡の性格づけの上で検討を要した。

切り込みは、切り込み1・2が舌状丘陵の付け根付近に、切り込み3が切り込み2と谷をはさんで位置する。切り込み1は県道脇の宿ノ坂橋の奥にあり、切り込みから外に向かって不自然なテラスが広がっている。切り込み1・2・3は丘陵・谷を越えて一直線上に並ぶ。

中世期の堀切とみた場合、①丘陵先端の調査区付近を防御するものなのか、この位置に堀切る意図が説めない、②一直線上に並ぶ点は違和感がある、といった点が課題であった。その後、文献・聞き取り調査等を進める中で、高鍋史友会会員の方より「切り込みは大正初期に企画された高鍋軽便鉄道の軌道予定地跡ではないか」との御教示を得た。高鍋軽便鉄道は、西米良～木城～高鍋間の人・木材の輸送・運搬を主目的に大正9年に企画されたものの、計画半ばの昭和5年、世界恐慌等の煽りを受けて倒産している（岩切1984）。切り込みが高鍋軽便鉄道の軌道予定地跡であれば、先の課題①②も解決でき、現地の観察でも妥当と判断した。



第116図 高鍋軽便鉄道跡の位置

## 第VII章 総 括

野首第1遺跡の調査では、旧石器時代から近代までの各種遺構・遺物が大量に確認された。

旧石器時代については、県内において調査例の少なかった始良Tn火山灰下位石器群についてほぼ丘陵全面にわたって調査できた意味は大きい。また、縄文時代各期にわたって丘陵部の利用のあったことや、古墳時代中期後半・終末期の集落の存在、中世末の大規模な掘立柱建物や近世～近代の土坑群が確認された。さらに、これまで知られていなかった野首古墳群が新たに発見されるなど、地域史を構築するうえでの重要な知見を、通史的につか数多く得ることができた。本章では、今回の調査成果を時代ごとに整理し総括としたい。

### 【旧石器時代】

旧石器時代には、始良Tn火山灰下位の暗色帶中部のI期、始良Tn火山灰上位でKr-Kb前後のII期が確認された。剥片剥離技術はI・II期ともに縦長剥片の獲得が主であり、とくにII期前後の宮崎平野部でよくみられる横長剥片剥離技術が消極的である点は、本遺跡の大きな特徴となっている。角錐状石器は横長剥片素材であり、同一母岩もなく搬入品と考えられる。

石器石材は眼下の小丸川で容易に獲得でき、また、丘陵は川に向かって突き出た位置にあることから、非常に見通しのきく好所である。I・II期とともに礫群が形成され、また原石を持ち込んでの剥片剥離がみられる。I・II期ともに一定期間の居留があったのであろう。

また、1点のみであるが船型による細石刃も出土し、旧石器時代最終末から縄文時代草創期にも何らかの利用があったようである。

### 【縄文時代】

遺構が最も多く残されるのは、早期中葉から後葉、田村式から手向山式期であり、数多くの集石遺構・土坑が形成される。散礫には手向山式・塞ノ神式土器が混在することから、早期後葉に形成されたものであろう。集石遺構・土坑より、散礫はやや後出する。

土坑はとくに複数の炉穴が切り合った結果、ヤツデ状にのびる一群が特徴的である。こういった炉穴群の多くは、丘陵端部にコンタに直交してのびるように分布する。分布のあり方からは、これら炉穴群が丘陵斜面下から吹き上げる風を利用し、火の効率的な利用を図ったものと推定される。散礫の分布も炉穴群と同じく、丘陵斜面や傾斜変換点にある。集石遺構については双子状のものが一定数見られ、いずれも他集石遺構と比べ規模が大きい。

石器は小形剥片石器にチャート・姫島産黒曜石など、遠隔地石材が利用される。石鎚（336・356～358・384）はチャート・腰岳産黒曜石・桑ノ木津留産黒曜石・白色珪岩・姫島産黒曜石と石材は異なるものの、製作仕様が一致する。これらはその形態から早期中葉から後葉のものと推定される。他石器も多くは早期中葉から後葉の所産と思われるが、明確ではない。チャートには石核がなく、石鎚・スクレイバー類・剥片・碎片で構成される。姫島産黒曜石については石鎚・スクレイバー類のほか、石核や碎片もみられることから、遺跡内での剥片剥離がうかがえる。石鎚は鋸歯縁ぎみのものが目立ち、

ほか石材製のものと異なることから、編年差を示す可能性もある。

礫石器系は大形のスクレイパー類・石斧がある。とくに尾鈴山酸性岩類を利用した大形スクレイパー類は、宮崎平野南部における砂岩製大形スクレイパー類に対置するものとして石材利用上注目される。石斧は在地石材製で遺跡内製作である。礫石器系の時期は明確でなく、早期・後期あるいは一部、弥生時代以降のものが混在する。

前期末から中期、後期前半の遺構は未確認である。打欠石錐の大半は周辺遺跡の事例から該期を中心としたものと推定され、眼下の小丸川やその河口域での内水面漁撈などがうかがわれる。

近年の宮崎平野部の調査成果からは、縄文早期遺跡の遺構・遺物のパターンとして、大規模な散礫や数多くの集石遺構・炉穴群を持ち、大量の遺物も残される遺跡と、遺物・遺構ともに小規模でかつ陥し穴をともなう場合のある遺跡がある。前者は大・中河川に面した丘陵部、台地縁辺に多く、後者はやや奥に入った台地上に立地する傾向がある。本遺跡は前者にあたり、当時の集団領域などを考えるうえで重要である。

#### 【弥生時代】

弥生時代後半～末には、少量ながらも壺を中心に土器の出土があり、該期の小規模な集落等が展開した可能性がある。弥生時代前期から後期前半は確認されない。

#### 【古墳時代中期後半】

古墳時代中期後半になると、丘陵頂部に集落が展開し、それは南側の未調査区にも広がりをみせている。丘陵先端側には該期の集落は占地しない。各竪穴は、切り合ひなく構築される。竪穴の主軸と丘陵の軸とが平行することから、地勢に規制された住居配置といえる。掘立柱建物は確認されない。

住居床面積はおおむね20～25m<sup>2</sup>前後と一般的である。屋内構造をみると、柱穴の並びに歪なものが多く、また壁帶溝や火穴がほとんど確認できない。竪穴内からは壺・壺といった日常雑器が出土する。また、SA5において鍤とも考えられる棒状礫が4点出土した。特殊遺物はみられず、遺構配置・規模等からも一般的な集落といえる。生業としては丘陵下の谷地を利用した水田農耕や背後の台地での畠作、眼下の小丸川における水産資源の獲得などが想定される。

第50表 野首第1遺跡の年表

旧石器時代	姶良 Tn 火山灰下位・上位2時期 各期ともに礫群あり 小丸川の礫を利用した石器製作
縄文早期	大規模な散礫や数多くの集石遺構・炉穴群が残される
縄文前期～後期	内水面漁撈等の活動 集落等は存在しない
弥生後期	小規模な集落？
古墳中期	集落が丘陵頂部の平坦面を中心にひろがる
古墳終末	集落が、丘陵頂部の平坦面のほか、急斜面の斜面部にもひろがる 集落に近接して古墳群が築造される
鎌倉時代	集落？
戦国時代	掘立柱建物2棟が前後して建てられる (見張り台あるいは番所か)
江戸時代末～明治時代	丘陵下の集落にともなう廬窓穴が掘り込まれる

### 【古墳時代終末】

後期後半から終末の集落は、丘陵頂部（標高約35m）と斜面部（標高約20m）に各1軒となり、中期後半に住居が占地していた一帯には、該期の竪穴住居は確認されない。これは、集落が前代に比べ縮小あるいは移動した結果と考えられる。とくに、比較的急傾斜な斜面部にまで竪穴住居が広がる。これと前後して、谷に面した位置に野首古墳群が築造される。古墳群と竪穴住居（集落）が同一丘陵上に近接して立地する点は、該期における集落立地上の規制等の存在をうかがわせる。

野首古墳群は、今回の調査で初めてその存在があきらかとなった。調査したのは1号墳の玄室・周溝の一部のみであり、全体像があきらかになったとは決して言えない状況ではあるが、既知の古墳群との関係をここで整理しておきたい。

まず、野首1号墳の時期は出土遺物から7C前半である。小丸川に面した持田・川南・山塚原古墳群、永山古墳はともに6C末までに収まり、本遺跡背後の標高80~90m前後の台地上の牛牧1号墳は7C前半とされる。このように、野首1号墳は、小丸川に面する造営年代の判明している古墳の中では最終段階の1つである。古墳の立地からは、野首古墳群は現木城町方面を意識したものであり、一方の牛牧古墳群は牛牧台地上を意識したものといえ、両者の造墓集団は異なるであろう。さらに、横穴式石室を持つ例として、野首1号墳に近い時期に造営された持田84号墳、永山古墳があげられる。これらを玄室奥壁幅で比較すると、野首1号墳が2.2mと最大である。副葬品にも鉄製武器・馬具類が豊富で、馬具類には金銅貼りのものもみられる。古墳の道営時期・立地や副葬品構成からみて、野首1号墳については、小丸川下流域における最後の首長墓的な性格と捉えることができる。

### 【鎌倉時代から戦国時代】

古墳群築造以後、中世から近世末まで当地の土地利用は非常に疎となる。

中世I期は、遺物の特徴から13C代であろう。調査区外に一定の集落展開等も予想される。

中世II期は、掘立柱建物2棟が相前後して建てられ、中国製の舶載陶磁器を廃棄された土坑が残される。掘立柱建物は5×2間、3×2間で、柱穴規模や柱痕跡から径30cmほどの柱で構築されたと推定される大型のものである。とくに前者は身舎が間仕切られた可能性があり、庇もめぐる。柱材の炭素年代や土坑出土遺物から15~16C代のものでああろう。

この掘立柱建物の性格を考えるうえで、遺跡の立地条件が重要と考える。建物位置に立つと、西北はあるかに木城から尾鈴山、東に川南・持田の台地と眼前を流れる小丸川が見渡せるように、たいへん広い視野を獲得できる。また、近世の『高城之合戦絵図』をみると、小丸川南岸における、現高鍋市街から木城方面へ抜ける主要道は、牛牧台地を登るほかは丘陵下を抜ける。小丸川の水運も見逃せない。すなわち、掘立柱建物の性格として、高城の合戦ほか戦国期の戦乱に備えた見張り台、あるいは人・物資の交通・運搬を管理する番所的な性格と捉えることができる。

また、野首1号墳の墳丘をはじめ、丘陵頂部を中心に大きく削平が進んでいた。丘陵頂部では、部分的に始良Tn火山灰下位の黒褐色土まで削平される。この削平の時期を知るうえで、のちに触れる近世末から明治期の土坑群が注目される。すなわち、土坑群のいくつかが丘陵南端に盛られた造成土に掘り込まれていたことから、少なくとも削平は、古墳築造以後で近世末より前となる。一つの可能性として、掘立柱建物を建てるとき、丘陵上を平らにするような造成をおこなったと考えられる。

第51表 小丸川流域の横穴式石室の比較

	野首1号墳 群集墳	永山古墳 單集墳	持田84号墳 前方後円墳10基・円墳75基	持田県1979調査
墳形	円墳 削平苦しいが、およそ直径 7.2mか	円墳 削平苦しいが、少なくとも 直径10m・高さ2mか	円墳 直径12m 現高2.5m(想定4.5m) 墳頂には径約4.5m 平坦面・石室全 長7.4m	円墳か
玄室	長1.9m + α 奥壁幅2.2m	長2.8×幅1.5m 高1.5m以上	長3.8×幅1.65(奥壁)~1.8(玄室中央)m 高2.4m前後 四壁がやや剥落するものの、ほぼ長 方形	
ブランク	奥壁・両側壁とも河原石積み I工程 最下段に石材を一周させ、 玄室プランを決定する II工程 2段目は、石材の側面を見 せながら積む 奥壁・側壁には力石あり III工程 3段目以降、石材の小口面 を見せながら、持ち送りを 意識して積む	奥壁・両側壁とも河原石積み I工程 最下段に石材を一周させ、 玄室プランを決定する II工程 2段目から、底長の石材を 小口面内にほぼ垂直に積む この積み方は6~7段(床 面から1.5mほど)まで連 続する ※石室誕生は地山削りだし	奥壁・両側壁ともに3段積築 I工程 最下段に幅0.4~0.5mの比較的大きな 形の積った壁長の石材をめぐらして平 面形を出す II工程 0.8mほどの高さに、不整い丸石をや す持ち送りぎみに積む III工程 持ち送りを急にして積み上げ、天井石 を置く ※床面は奥壁側に向かって傾やかに下が る	河原石で石積み 県史掲載の写真から は、少なくとも2~3 段は積んであるよう に見える
床	玄室のみ調査 10~20cm大の平石を一面 のみ並べる	玄室のみ、30cm大の平石 を並べ、平石上にさらに円 礫が敷かれる	玄室のみ、10~30cm大の平石を並べ、 平石上にさらに網羅が敷かれる	
渡道	不詳	長1.1×幅1.1m高1.5m以上	長3.6×幅0.65(玄門)~1.5(奥門)m	不詳
石材	尾崎山酸性岩類	河原石6段残存 + α	2段積みで、壁面は垂直に近い	尾崎山酸性岩類
	(野首1号墳に比べ小振り)	尾崎山酸性岩類(原報告の花崗岩・閃 綠岩)、砂岩		尾崎山酸性岩類

なお、宮崎県史には、持田無号石室墳と県教委1979年調査古密とを同一石室の可能性があるとの記載がある。しかし、調査風景の写真と比較すると、「長4.3×幅0.8(奥壁)m、残存高0.6m」(県1969年原報)の記述と合致せず、明らかに別石室である。そこで、1979年調査分を「持田県1979調査石室墳」と呼び、原報の「持田無号石室墳」とは区別しておきたい。

#### 【江戸末期から明治時代】

次に遺跡が利用されるのは江戸末期(18C後半)を待たねばならない。出土陶磁器に型紙刷りはほとんどなく、また現代のプリント系を除くとその大半が18C後半から19C前半に集中する。遺物相や遺構配置からは、突如、遺跡の利用が再開された印象を受ける。

『日向地誌』によれば、明治時代には丘陵下の谷間に小規模な集落が存在したようである。調査結果からは、丘陵上平坦面には該期の家屋等ではなく、谷間の集落から上がってすぐの丘陵落ちぎわに土坑群が横並びに掘り込まれていた。土坑中からはイヌのほか、ウシ・ウマ等大型獣の骨多数のほか、庖丁様の刀子なども出土しており、土坑はそれらの廃棄穴と考えられる。土坑間に切り合はない。

なお、地元の方に伺うと集落は昭和初期まで存続したという。集落脇を走る旧道は、集落の手前で十字路となり、十字路脇の祠の横を抜けて峠(丘陵)越えの旧道がのびていたそうである。

#### 【現代へ】

峠(丘陵)を越える旧道は戦後の道路付け替えで機能を失くし、今再び県道改良工事によって丘陵そのものが大きく削り取られることになった。かつて丘陵上にあった、百濟王伝説に関係する『姫君の墓』も新県道の脇に移設され、これから歴史を静かに見守っている。

## 【参考文献】

### 【古墳時代】

- 石川悦雄ほか 1990『永山古墳』木城町文化財調査報告書第2集  
今塩屋駿行・松永幸寿 2002「日向における古墳時代中～後期の土師器－宮崎平野を中心にして－」第5回九州前方後円墳研究会「古墳時代中・後期の土師器－その編年と地域性－」発表要旨資料、pl45-173  
谷口武範・西谷真治 1993「持田古墳群」『宮崎県史 資料編 考古2』

### 【中世】

- 小野正敏 1982「14～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』NO.2、p71-88  
柴畠光博編 1997『田代・尻枝遺跡』都城市文化財調査報告書第38集  
谷口武範 1984「土師器に関する二・三の問題について」『山内石塔群』宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第1集、p91-110

### 【近代】

- 岩切悦子 1984「高鍋鉄道株式会社」の消長（一）～（三）－略年譜と資料紹介－『史友会報』高鍋史友会  
加藤嘉太郎・山内昭二 1995『新編 家畜比較解剖図説』上巻、養賢堂

# 図版



旧石器調査グリッド（A2区）



旧石器調査風景



A2区旧石器Ⅱ期遺物出土状況



A2区旧石器Ⅰ期遺物出土状況



旧石器Ⅱ期砾群（SI 8）



旧石器Ⅱ期砾群（SI 9）



旧石器Ⅰ期砾群（SI 1）



旧石器Ⅰ期砾群（SI 3）



竪穴住居 (SA101)



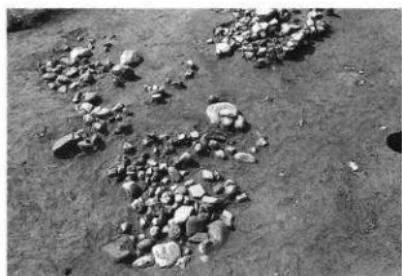
竪穴内遺物出土状況 (SA101)



土坑 (SC14~17)



土坑 (SC29)



集石遺構 (SI14・15・17)



集石遺構 (SI32・38)



集石遺構 (SI17)



集石遺構 (SI2)



集石遺構 (SI26)



集石遺構底石 (SI26)



集石遺構 (SI27)



集石遺構 (SI33)



集石遺構底石 (SI44)



集石遺構底石 (SI45)



集石遺構 (SI48・49)



集石遺構底石 (SI48・49)



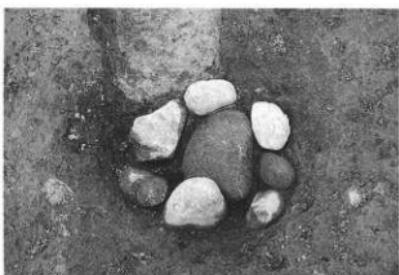
集石遺構 (SI46・47)



集石遺構底石 (SI46・47)



集石遺構底石 (SI46)



集石遺構底石 (SI47)



集石遺構底石 (SI50)



集石遺構底石 (SI50)



弥生時代土坑遺物出土状況



弥生時代土器集中検出状況



野首1号墳検出状況



野首1号墳調査風景



野首1号墳玄室右壁から奥壁



野首1号墳玄室左壁から奥壁



野首1号墳玄室内遺物出土状況（右奥壁）



野首1号墳玄室内遺物出土状況（左側壁）



野首1号墳周溝土層断面



野首1号墳周溝遺物出土状況



野首2号墳の現状



古墳中期竪穴住居 (SA1)



古墳中期竪穴住居 (SA2)



古墳中期溝状遺構 (SE1)



古墳中期竪穴住居 (SA4)



古墳終末期竪穴住居 (SA10)



古墳終末期竪穴住居 (SA13)



SA13土器埋設炉断面



掘立柱建物から木城町高城方面をのぞむ



掘立柱建物 (SB 1)



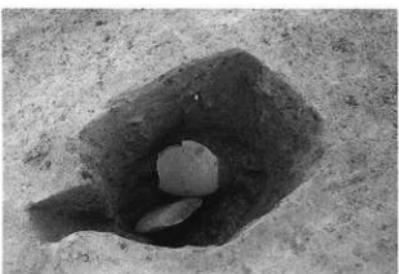
SB 1 の柱穴①・②断面



SB 2 の柱穴③断面



掘立柱建物 (SB 2) 柱穴⑤



掘立柱建物 (SB 2) 柱穴⑥



丘陵へ上がる道 (B 区)



丘陵へ上がる道と集蹟 (B 区)



五輪塔・板碑



新県道脇に移設された五輪塔・板碑



溝状遺構 (SE5)



近世以降の土坑群



近世以降の土坑 (SC1)



近世以降の土坑 (SC3) 獣骨出土状況

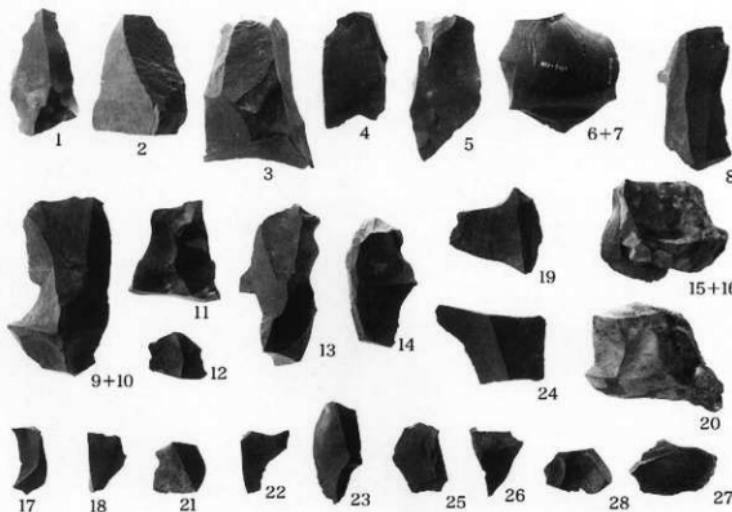


B区にあった『氏神さま』

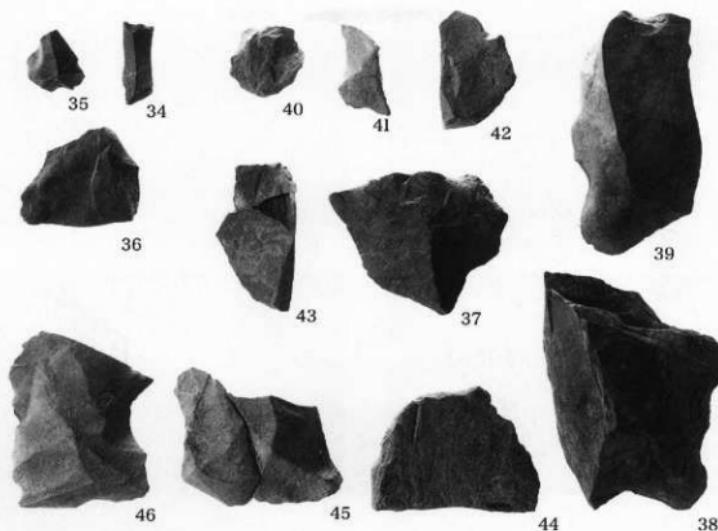


生物痕跡

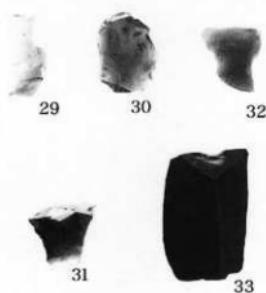
図版9



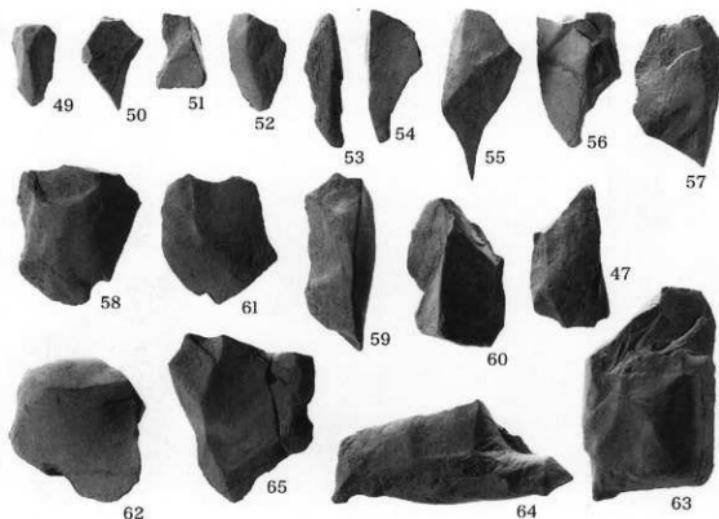
旧石器I期の石器(1)



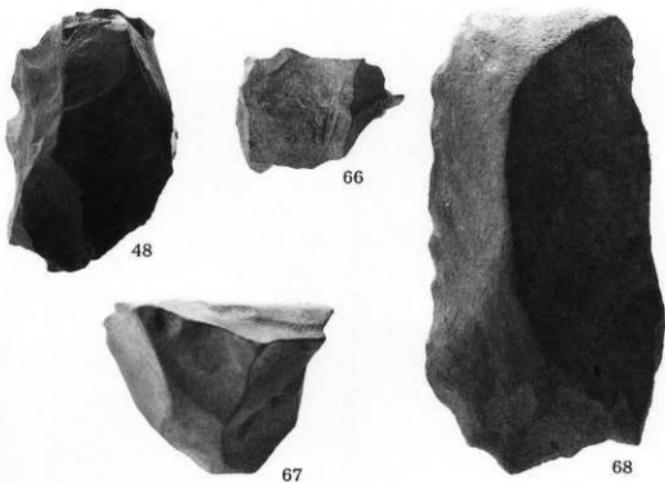
旧石器I期の石器(2)



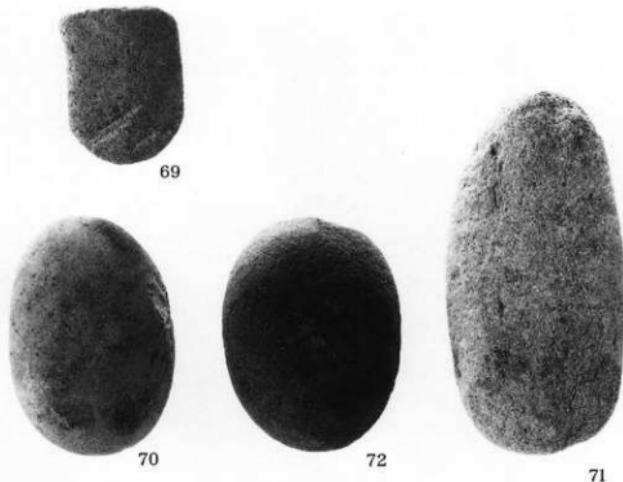
旧石器Ⅰ期の石器（3）



旧石器Ⅰ期の石器（4）

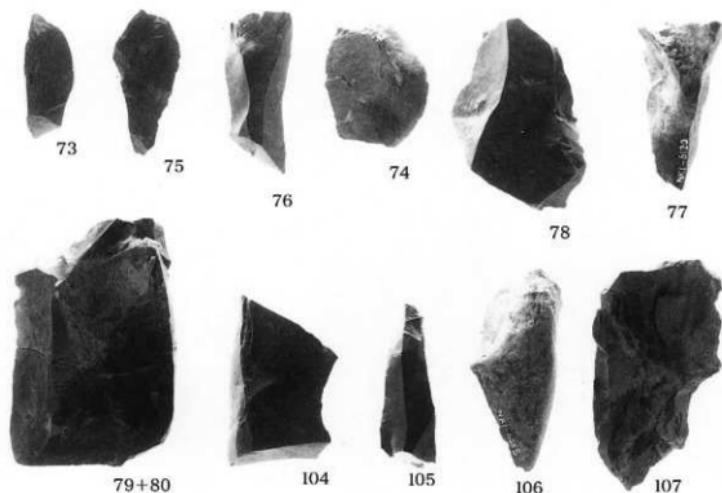


旧石器Ⅰ期の石器（5）

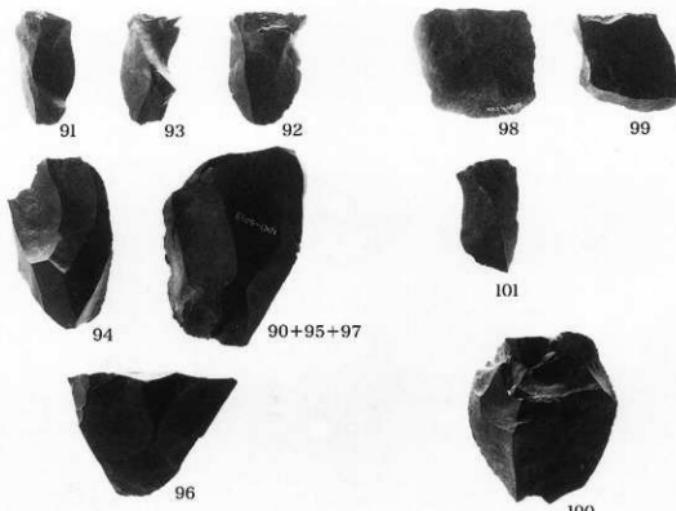


旧石器Ⅰ期の石器（6）

図版12



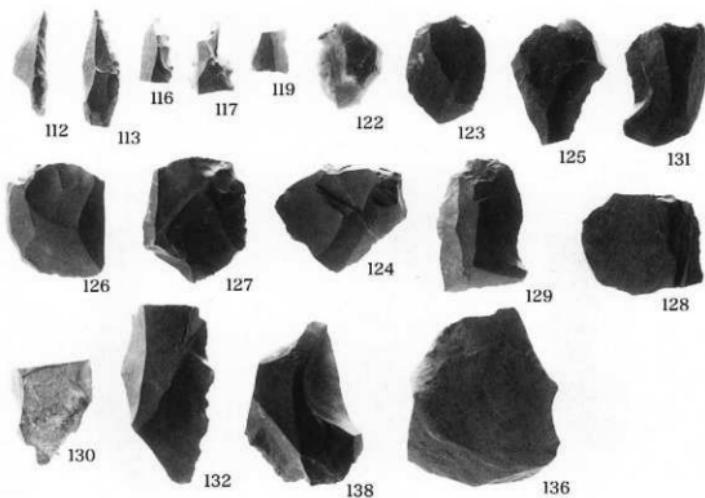
旧石器II期の石器（1）



旧石器II期の石器（2）

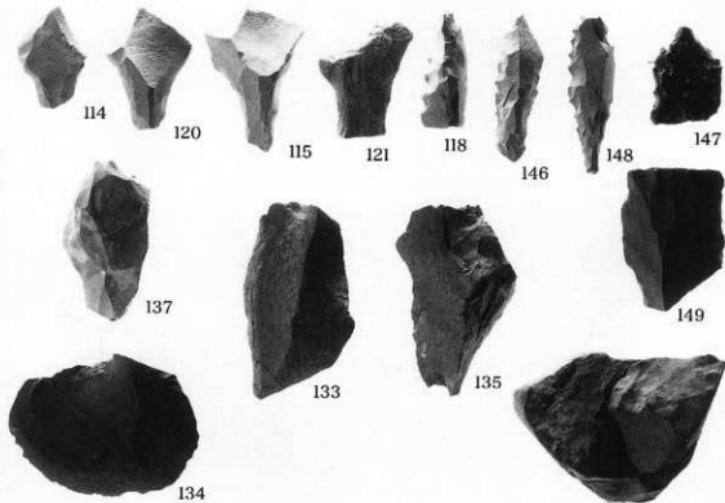


旧石器II期の石器（3）

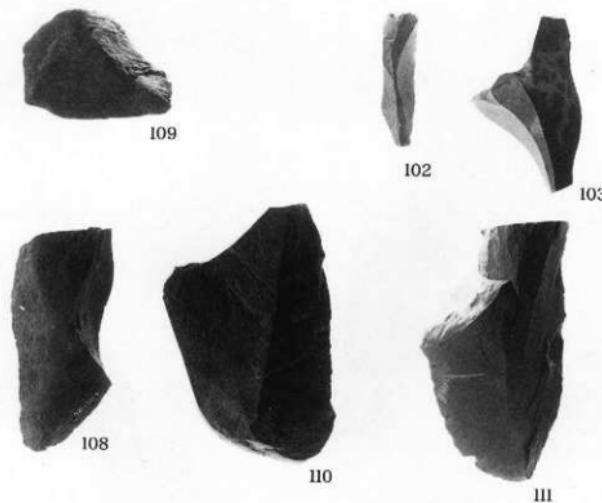


旧石器II期の石器（4）

図版14



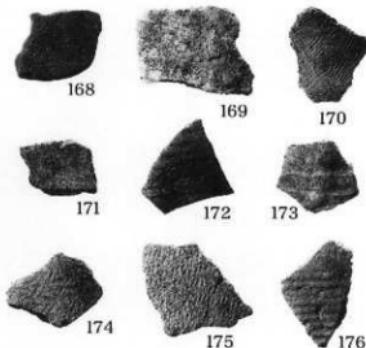
旧石器II期の石器（5）



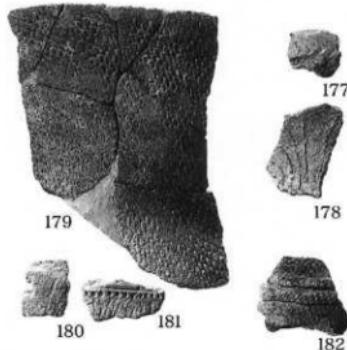
旧石器II期の石器（6）



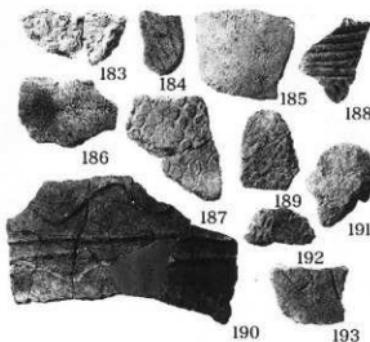
旧石器II期の石器（7）



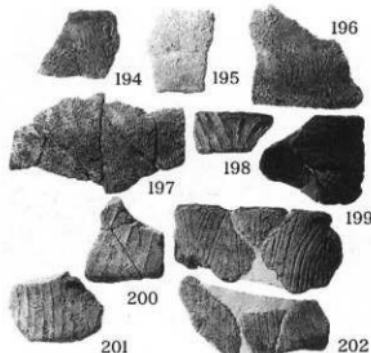
縄文土器（1）



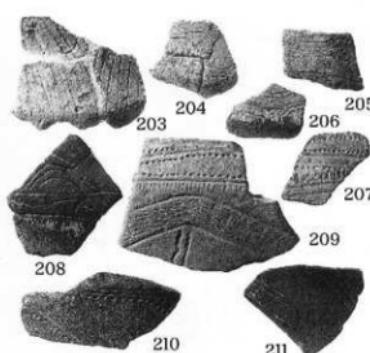
縄文土器（2）



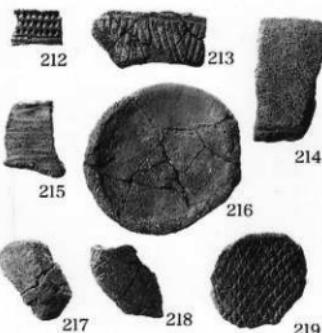
縄文土器（3）



縄文土器（4）



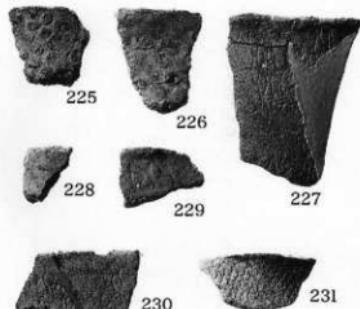
縄文土器（5）



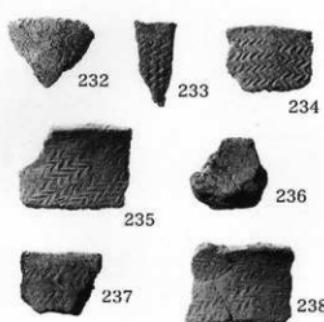
縄文土器 (6)



縄文土器 (7)



縄文土器 (8)



縄文土器 (9)



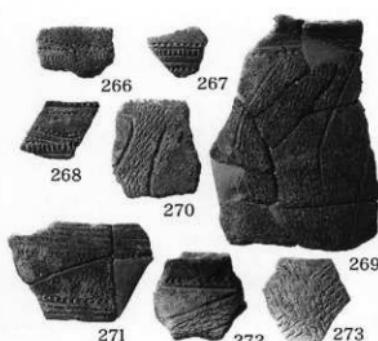
縄文土器 (10)



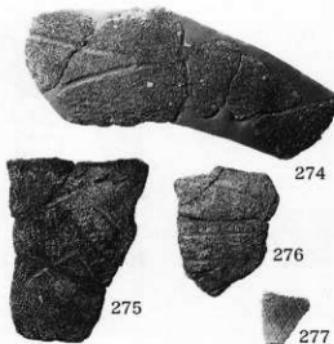
縄文土器 (11)



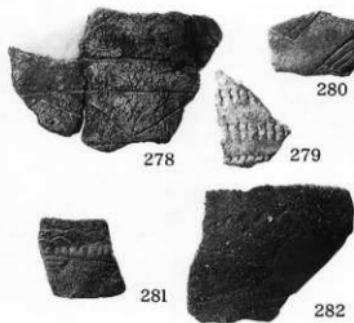
縄文土器 (12)



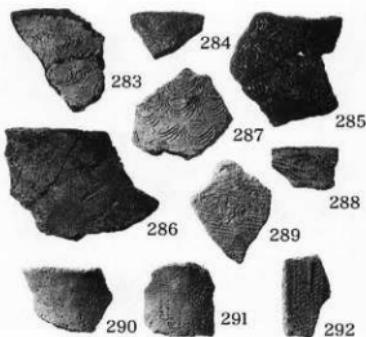
縄文土器 (13)



縄文土器 (14)



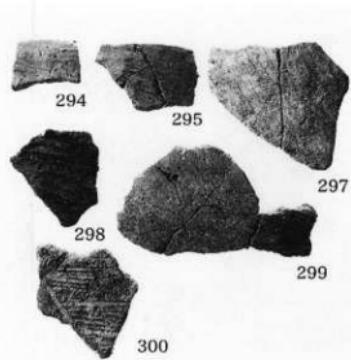
縄文土器 (15)



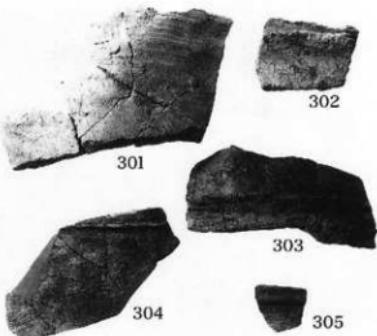
縄文土器 (16)



縄文土器 (17)



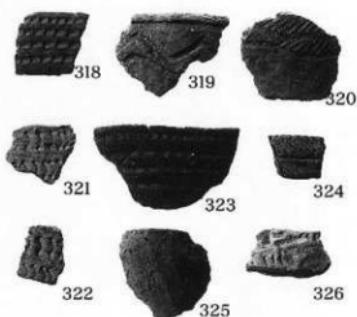
縄文土器 (18)



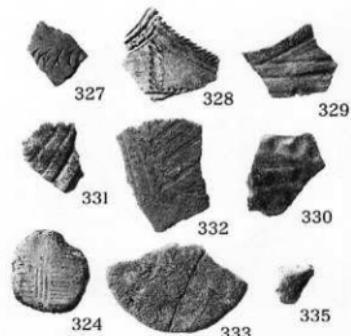
縄文土器 (19)



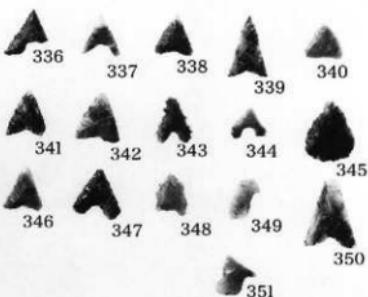
縄文土器 (20)



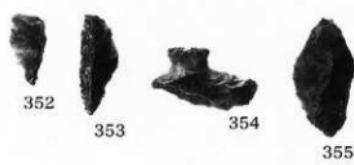
縄文土器 (21)



縄文土器 (22)



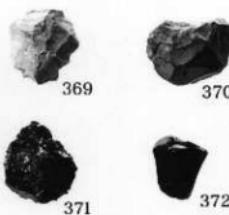
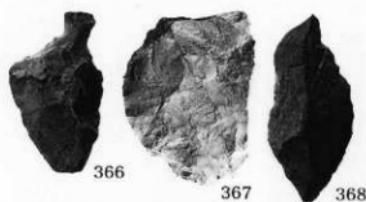
縄文石器 (1)



縄文石器（2）

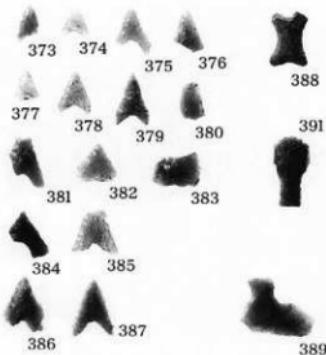


縄文石器（3）



縄文石器（4）

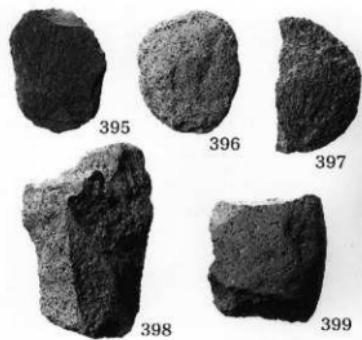
縄文石器（5）



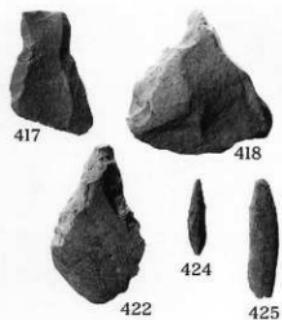
縄文石器（6）



縄文石器（7）



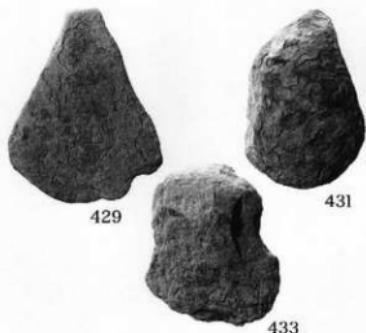
縄文石器 (8)



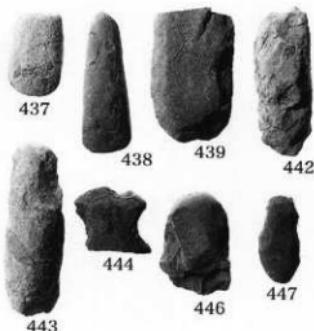
縄文石器 (9)



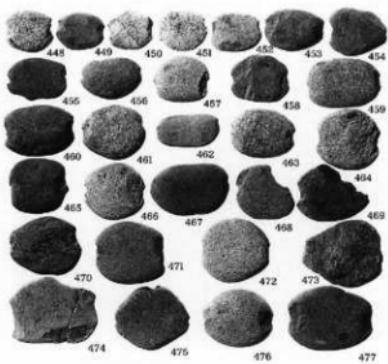
縄文石器 (10)



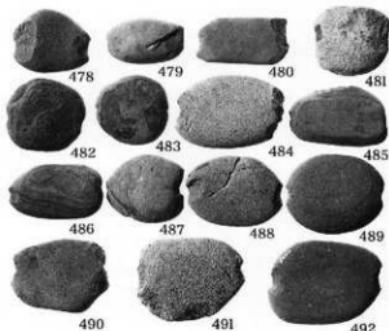
縄文石器 (11)



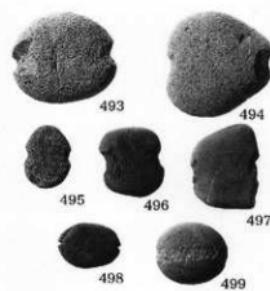
縄文石器 (12)



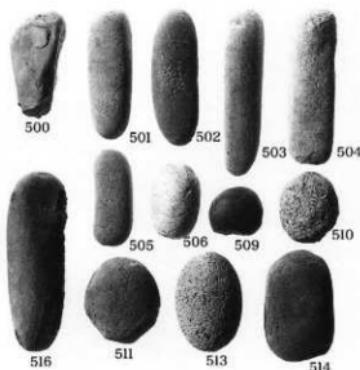
縄文石器 (13)



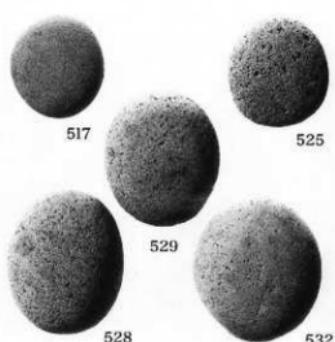
繩文石器 (14)



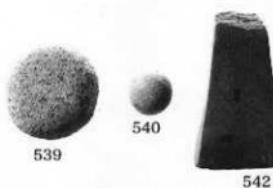
繩文石器 (15)



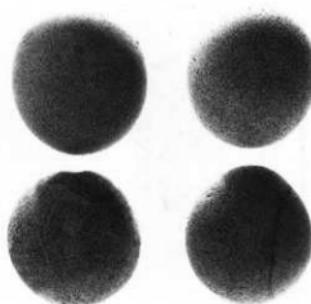
繩文石器 (16)



繩文石器 (17)



繩文石器 (18)



SA101出土繩文石器



543

弥生土坑出土土器



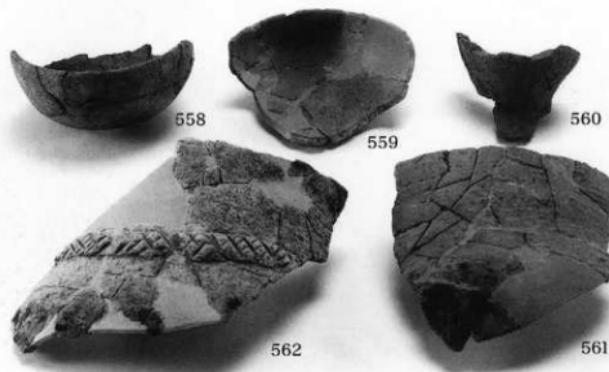
弥生土器集中出土遺物



SA1出土土器



SC7出土土器



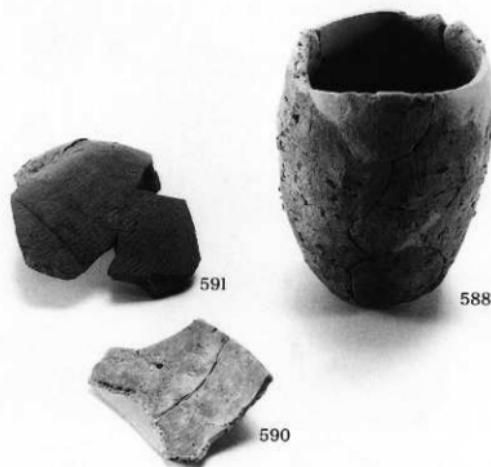
SA4出土土器



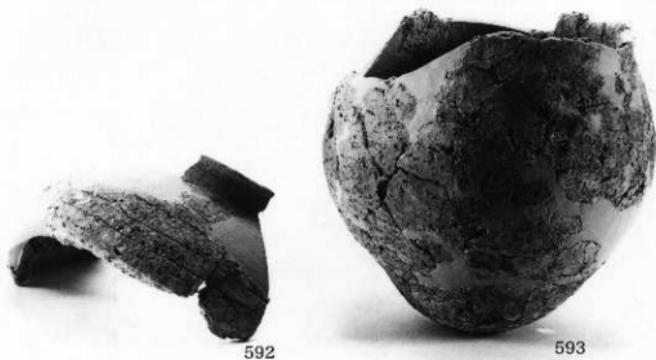
SA6出土土器



SA5出土土器



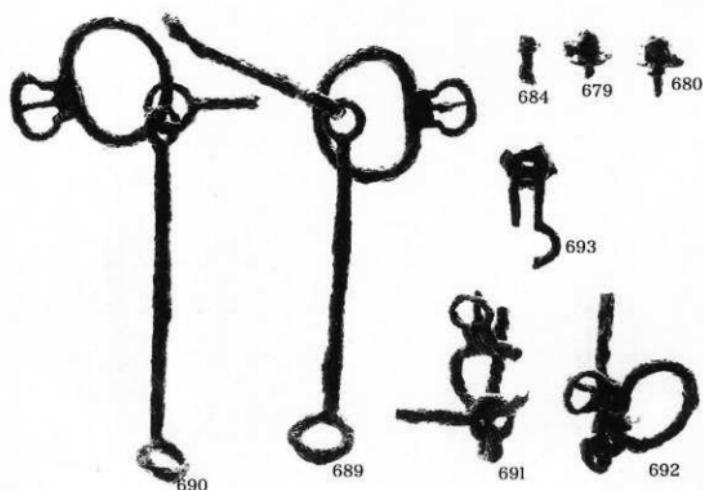
SA10 出土土器 (588は埋設土器)



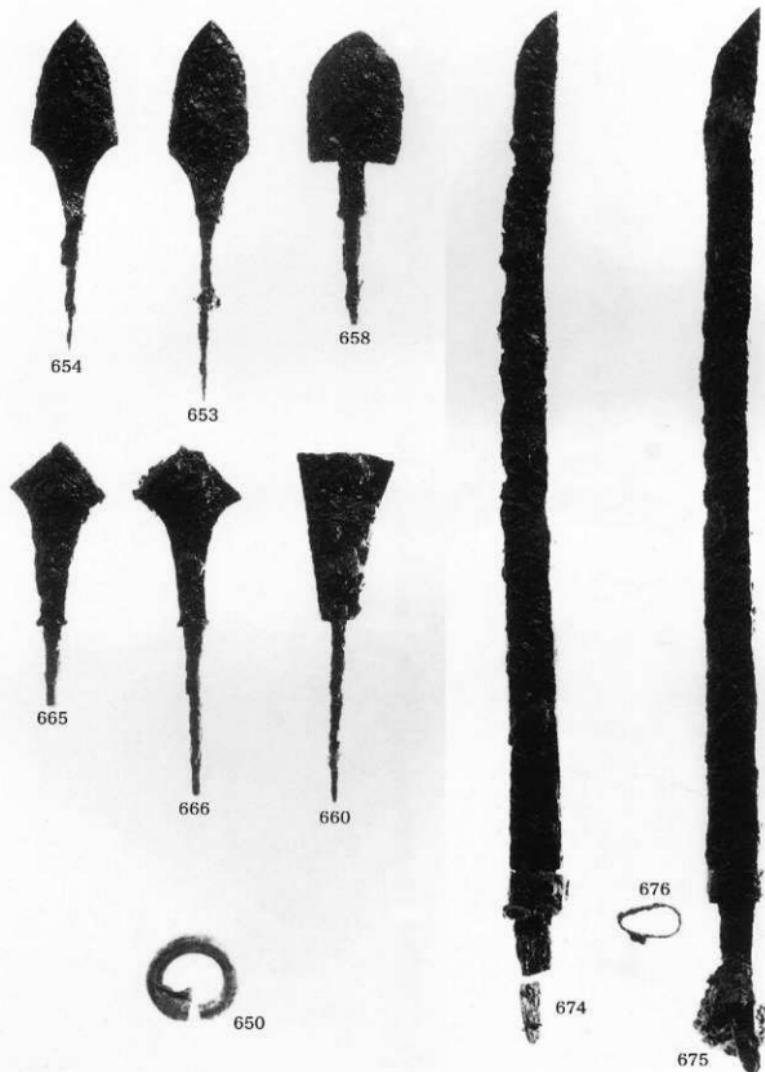
SA13 出土土器 (593は埋設土器)



玄室内出土須恵器（提瓶は周溝内出土）



玄室内・SC28 出土馬具類



玄室內出土武器類（1）·裝身具

玄室內出土武器類（2）



周溝内出土須恵器



周溝内出土大甕

大甕の接写（輪状の焼成痕）